

「取って食べよ」 -マタイによる福音書講解説教 104-

イザヤ書 第25章6節～9節  
マタイによる福音書 第26章 17節～35節

説教 岡村 恒 牧師

「イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、『取って食べよ、これはわたしのからだである』」（マタイによる福音書 第26章26節）主イエスは過越祭の食卓で、弟子たちを招いてこう言われました。

エジプト脱出前夜、ユダヤ人は発酵させる時間がないまま焼いたパンを食べ、苦しい日々を忘れることがないように苦菜を食べ、犠牲の小羊の血を心に刻むぶどう酒を飲んで、主の救いを体験しました。それ以降、過越祭のたびに、繰り返し神の救いの約束を確認してきました。

「また杯を取り、感謝して彼らに与えて言われた、『みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である』」（27-28節）最後の晩餐で主イエスがなされたこと、言われたことを2000年間、世界中のキリスト教会は繰り返し行ってきました。この食卓で、主の救いを確認し、味わい続けるためです。

この日、主が最初に言われたのは裏切り者の話でした。そしてその後で、全員が主イエスを捨てて逃げ去る。そのことをはっきりと告知なさいました。ペテロに言われました。「今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないというだろう」（34節）ペテロはすぐに言い返しました。「たとえあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」（35節）

神を信じ、主イエスに従いたいと心に決めても、なお艱難が襲ってくるたびに、神など知らぬ、イエス・キリストと私はなんの関係もないと言い切ってしまう。それが私たち人間の姿だと聖書ははっきり示しています。

聖書のどこを探しても自分の決断や覚悟で神に従い通した人など出てきません。あのペテロ、12弟子たちでさえ主イエスを捨てて逃げ去ったのです。主イエスは言われました。「よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」（32節）そこで新しいことが起こると、約束されました。

やがて主イエスの霊が弟子たちに注がれた時、彼らは初めて本当の信仰を持って神を信じ、主イエスを信じ、その信仰を告白して生き始めまるようになりました。聖霊によって、神の恵みと憐れみによって生きる者に変えられたのです。

世界中のプロテスタント教会は、10月の最後の日曜日を宗教改革記念日と呼びます。この機会に改めて私たちは教会の土台を確認します。終わりの日には、神のお創りになった世界全体が終わりを迎えます。人間がどれほど強固に土台を据えても、終りが来るのです。しかし500年前、宗教改革の時に確認をされた土台は、永遠に崩れ去ることのない土台でした。

聖書の言葉は永遠に変わらない。神の恵みは決して尽きることがない。聖霊によって与えられた信仰は私たちから取り去られない。死も滅びもどんなものも、神の愛から私たちを引き離すものなどない。聖書が語るこの真理を、500年前、宗教改革者たちは再発見しました。

私たちが何かをしたから救われるとか、何かをしないから滅びるのではなく、ただ神の憐れみを信じ、主の恵みの中で生きる時、信仰者は滅びることがなく永遠の命を得る。教会の土台、私たちの命の土台が確認されました。そして聖餐の礼典も変わりました。あの日主イエスが「取って食べよ」と言われたパンを喜んで受け取り、「この杯から飲め」と言われた杯を手を受け取って、主イエスの命を繰り返し味わう聖餐の食卓が回復されました。

私たちの体の中に主イエスの命が入り、身となり、血となり、駆け巡り、この私を生き活きと生かせる。私たちはこの食卓で、この出来事を体験し続けています。私たちは全て、聖餐のパンと杯を受け、神の恵みを受けるのにふさわしくない者です。しかし神はそのような私たちを憐れんで、ただ主イエスを信じる信仰のみで、罪を赦し、永遠の命を与え、神の子と呼んでください。日曜日の礼拝毎に世界中の教会でこの話が2000年間繰り返されてきました。

主イエスはあの弟子たちをご覧になりながらパンを裂き、最後まで愛し抜いてくださいました。しか主の瞳に映ったのは弟子たちだけではありません。主の深い哀れみに満ちた眼差しは、私たち1人1人を映しています。あなたのために私の肉がさかれ、あなたのために私の血が流され、それによって、あなたの赦しが完成し、あなたは確かに神の愛の只中に移され、包まれ、生きようになる。今日も、主イエスは私たちをそのように招いておられます。

（記 説教要約奉仕者）